

(様式 2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書 (引率者用)

平成 23 年 11 月 25 日

所属・職名：秋田大学国際交流センター・准教授

氏名：牲川 波都季

研修期間：平成 23 年 9 月 5 日～平成 23 年 10 月 2 日

研修先：英文 University of Victoria, English Language Center

：和文 ビクトリア大学 英語学習センター

○研修成果

当初の研修目的とそれに対する成果を以下に記す。

英語力向上：

- ① 3レベルの能力別クラスがあり、適切なレベルの授業を受講することができる。
→一つのクラスに多様な出身国の学生がいたため、英語のさまざまなバリエーションを知ることができた。また、能力別クラスを経て、学術的英語を学ぼうとするクラスメートもいたことから、英語学習に対する意欲が高まった。
- ② 秋田大学の学習環境では向上の難しい、話すこと・聞くことを中心としたクラスである。
- ③ 月曜日から木曜日までの、毎日5時間の集中授業である。
→特定のテーマに対するディスカッションや発表活動がしばしば行われ、話すこと・聞くことの自身のレベル、何が問題かを発見することができた。文法は知識としてもっていたが、それを使う能力の不足、語彙の不足、発音能力の不足などが、問題点として自覚できた。
- ④ 期間中すべてにわたるホームステイにより、英語使用の機会を十分に提供できる。
→ホストファミリーとの会話から、自身の英語でもコミュニケーション可能だという自信を得るとともに、反面、語彙の不足などから十分な議論ができなかったという問題意識を得て今後の英語学習への動機が高まった。

カナダ文化についての知識獲得：

- ① 毎金曜日に社会文化活動が行われる。
- ② 研修期間中、ホームステイでカナダの実際の生活を体験できる。
- ③ その他、オプションで多種多様なアクティビティーに参加できる。
→ホームステイにより、カナダの生活文化だけでなく、同じうちに滞在していた別の留学生の文化も知ることができた。また、週末、バンクーバーや、近隣の別の町に、自分たちだけで旅行した者も多く、そこで出会った人々や体験が、学生たちのカナダ文化像を形成したと考えられる。

(様式 2)

○研修期間全般にわたる感想

ビクトリア大学英語学習センターのプログラムは、内容中心の英語授業を行っており、自らの意志を英語で伝えあうという、日本の英語教育では培われにくい能力育成を目標としている。また、ホームステイの受け入れは経験のある家族によって行われており、学生に英語でコミュニケーションできるという自信を与えるだけでなく、初めての海外生活を安心しておくための基盤となっている。また当地では T&D ビクトリアサポートセンターの林大輔氏が、研修期間中、学生の様子を見るなどサポート体制が整っている。

こうした条件がそろっていることから、参加学生たちにはそれぞれの学びがあったと言える。

参加学生 5 名は、研修前から教育推進総合センターの ALL ROOMS で学ぶなど意識的に英語学習を行い、4 週間の研修に臨んだ。その結果、研修を通じて、英語に対する問題意識、それをどう解決しまた将来につなげていくかについて、その学生なりの明確なビジョンを得たと考えられる。5 名のうち教育文化学部国際言語文化課程の 3 名は、将来長期の交換留学に行きたいという意志を固めている。教育文化学部人間環境課程の 1 名は、英語に非常に自信がなかった状態から、今後は自分の専門を生かし地球環境に関する海外ボランティアに行く可能性を探り始めた。医学部医学科の 1 名は、現時点で実現の可・不可はわからないものの、専門を学ぶための海外長期留学という夢を抱くようになった。

後述の濱田助教のコメントによれば、英語そのものの運用能力も伸長したとのことであるが、期間は 4 週間と限られ著しい伸びがあったと言いきることはできない。しかし、自分が何をすべきなのか、これから何をしたいのかという、学生生活の目標を明確化していくという点では成果があったと言える。今回の研修では、報告会を含め 4 回の事後研修を実施した。何が成果だったのかの自覚はこの事後研修から得られたと考えられる。今後はビクトリア大学での研修を毎年の事業として実施し、事後研修部分も含めて単位化を図れば、全体として、短期海外研修を通じた学生生活の質的向上といった教育目標の達成も期待できる。

なお本事業では、英語力向上面での事前・事後サポートを教育推進総合センターの濱田陽助教・サイクスジョー助教から得た。牲川は主に事後研修を担当し、国際交流課の正木が手続きや林氏を通じてのビクトリア大学との連絡を担当した。

○濱田陽助教（教育推進総合センター）からのコメント

まず、顕著に見られたのが、発音の向上である。研修前よりもきれいな発音になり、聞く側がわかりやすい音に近くなっていた。次に、発話の仕方である。一般に、日本人学習者の場合、母語の影響からも、表情・発話に抑揚のない話し方をすることが多いが、その点において変化が見られた。表情による表現が豊かになり、会話のリズムが研修前よりも出ていた。さらに、流暢さにも変化が見られた。研修前には単語が出てこなくてもどかしい様子が見られたが、その点においても大きな進歩が見られた。最後に、文法をより正確に使えるようになっていた。本学の学生であれば、ある程度の文法力は備わっているため、書く場合には注意すれば大それた間違いはしない。しかし、通常会話の際には多言語使用時の脳の中の注意資源に限界があるため、初歩的ミスが多くなる。その点が、研修後には明らかに改善されていた。一か月でのここまでの進歩は正直なところ、驚いたというのが本音である。